

## 十和田中央病院に男性の周産期うつ外来

# 「父親も無理せず相談を」

5月に十和田市立中央病院メンタルヘルス科内に新設された「男性の周産期うつ外来」。かねてより研究を続けてきた同科の徳満敬大医師が、受診のハードルを下げたいーとの思いで看板を掲げた。全国的にも非常にまれな取り組みで、業界内外からの注目も高い。徳満医師は「父親もサポートを受ける立場であることを知ってほしい」と開設の意図を強調する。

周産期（産前・産後）うつは、妊娠から産後1年の間に生じる疾患だが、父親となる男性側も1割程度がうつ状態になることが研究で明らかになっている。夫婦のうつは、家庭不和だけでなく子どもの虐待にもつながる危険をはらむが、男性のケースについては特に認知度が低く、受診に至らず苦しんでいる人が潜在すると考えられている。日常診療の中で、男性に

「男性の受診ハードルを下げたい」と外来新設の理由を語る、徳満敬大医師

6月上旬、十和田市



## 認知度向上へ徳満医師

対するサポートの必要性を感じていた徳満医師。実態把握を進めるため、2021年から十和田市と連携し、周産期うつの可能性がある男性を把握するためのスクリーニングシステムの構築を進めている。

女性にパートナーの状況を評価してもらった結果と、男性の自己評価が一致するかどうかを調べるもので、一致度が高ければ、女性の視点から男性のうつ状態を把握できる可能性が高まる。

「女性は妊婦健診や乳幼

児検診で保健師らと接する機会があるが、男性は仕事もあつて機会がない」と徳満医師。症状の可視化によって受診機会の増加にもつなげたい考えだ。

本来、うつ病患者に「頑張れ」という言葉は禁忌。ただ、周産期の男性は仮にSOSを出しても「頑張れ」「女性の方が大変」などの言葉をかけられがちだ。

徳満医師は、周産期は人生の中で精神的危機に陥りやすい時期と指摘し「出産をネガティブな体験ではなく、家族で乗り越えた成功体験にしてほしい」と強調。

適切な治療は、少子化の食い止めにも効果的とみえる。同病院では専門医3人態勢で患者を診るといい。「一度の受診とセルフケアで良くなる人もいる。お父さんも相談してほしい」ということを伝えたい」と話した。

（金濱千優希）